

する)は、中学校一年の鑑賞共通教材に定められている。そのため、ここでは、既に学習していると思われる歴史的背景などには触れず、音楽構成の面からのアプローチを行った。

「越天樂」で用いられている打楽器(太鼓、鞨鼓、鉦鼓)は、一定のリズムパターンを繰り返し、その際、互いの音を聴き合いながら演奏することによる「拍節のずれ」により、独特の雰囲気を醸し出している。今回の学習ではそのことに気づかせることをねらいとした。具体的な学習活動の流れは、以下のとおりである。

① 「越天樂」のメロディーを、アルトリコーダーで練習する。その際、リズムの感覚をつかむために、まず、〈譜例〉のプリントによる、口唱歌(くちしょうが)を練習する。

〈譜例〉^{注2}

雅楽「越天樂」より

○それぞれの打楽器の入る所を楽譜に記入してみよう

The musical score consists of four staves. The top staff is for the Alto Recorder (アルトリコーダー), featuring lyrics like "チーラーロヲロターテルラア" and rhythmic patterns. The second staff is for the Clapper (鞨鼓), with "X" marks indicating when it should play. The third staff is for the Bell (鉦鼓), also with "X" marks. The bottom staff is for the Drum (太鼓), with "●" marks indicating when it should play. The score is divided into measures by vertical bar lines.

② レーザーディスクによる「越天樂」の冒頭部分の演奏に合わせて、アルトリコーダーでメロディーを演奏する。

※ ①および②の活動は、この後、打楽器パートを聴きとって上の〈譜例〉のプリントに書き込む活動の準備段階として行う。なお、〈譜

例〉の楽譜は、アルトリコーダーで演奏した際にレーザーディスクの音と合うように、あらかじめ移調してある。

③ レーザーディスクを鑑賞しながら、打楽器パートの音型を〈譜例〉のプリントに記入する。その際、生徒同士で自由に相談し合いながら記入してよいものとする。あらかじめ、それぞれの打楽器の音と映像を確認し、視覚、聴覚の両方を用いて調べができるようにする。



④ 調べた結果を発表し、互いに確認し合う。その後、レーザーディスク鑑賞により、打楽器パートの最終的な確認をする。

⑤ 打楽器パート(手拍子による)とメロディーパートに分かれ、レーザーディスクの演奏に合わせて「越天樂」の冒頭部分を合奏する。

⑥ 合奏して難しかった点について話し合う。その後、雅楽のリズムパターンの特徴や、アンサンブルの際の注意点について考える。

雅楽の合奏の際、生徒からは「テンポをとっているのに、なぜ合わないのか」、「雅楽は合わせるのが難しい」との感想があった。

なお、第4時の終了の際に、以下の点について今後考えてほしいと話し、オープンエンドで授業を終えた。

○ 「リズムパターンの反復」の規則による

注2 書き込みは生徒による。